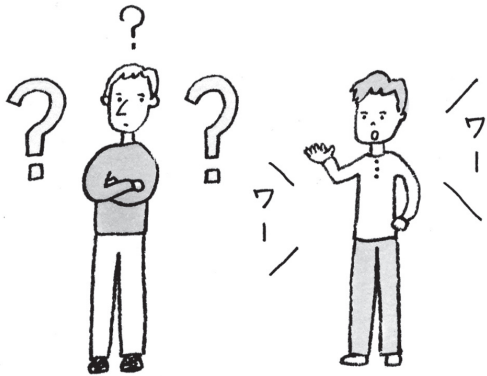


## 第 1 章

### 「？」が多発するローマ字読み



## ●敵を知り己を知れば……

みなさんは、初めて見た英単語をどうやって発音しますか？ 似たような単語から類推したり、まずはローマ字読みにして音を組み立ててみたり。何も手がかりがないよりはましかもしれませんが、このローマ字読みというのがしばしば問題を引き起こします。

ローマ字の表記はもともと日本語の50音をアルファベットで表すために考えられたものなので、英語の発音とは最初から異なっています。さらに、英語では同じ綴りでも、何種類かの音に発音し分けることがあります。ですから、あまりローマ字読みばかりをあてにしていると、結局、日本語にひっぱられた発音になってしまいます。

そこで、逆に英語の発想で日本語のローマ字表記を読んだ場合を考えてみましょう。

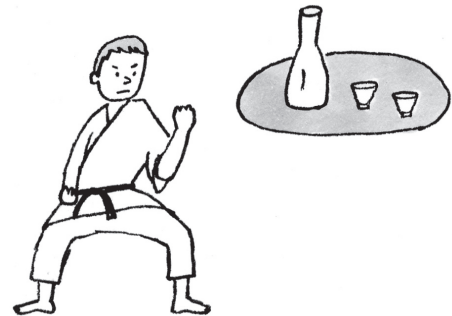
「はじめに」で、日本人にとって英語発音は大きなハードルだ、なんて言うっておきながら何ですが、実は、一般的な英語圏の人たちの日本語の発音はもっとずっとヒドイものです。それは逆に言えば、彼らが日本語

の発音ルールを知らないからなのです。

さて、いきなりですが、問題です。下の言葉は「日本のあるもの」を英語圏の人が英語風に発音したものです。さあ、何だかわかりますか？

- 1 サーキ
- 2 キャリオーキ
- 3 クラーティ

1はわりあい簡単。sake、つまり「酒」ですね。2はkaraoke、「カラオケ」です。このあたりからかなり難しい。そして、3は、karate、「空手」です。



「空手」が「クラーティ」!? 彼らが綴りだけから判断して発音するとこんなことになってしまうわけですが、どうヒドイかを注意深く見てみると、英語の発音をする際のルールがわかり、参考になります。日本語として「？」の部分が、むしろ日本人にとってはなじみがない英語発音のルールということになります。

先ほどの例を見てみると、まず二つのルールがわかります。一つは、**英語では後ろから二つ目の音節を強調することが多い**ということです。日本語は多くの場合、平坦な発音をしますが、それは英語にはなじみません。これは、「自分の名前を英語風に発音してください」と言うと、みなさん上手にできますね。「スズーキ」「タナーカ」「ワタナーベ」……。

もう一つ、**強調されない母音はいい加減な発音になりやすい**、というのも特徴です。「ウ」と「オ」の中間の音を、ちょっと力なく言う感じでしょうか。綴りのその母音にひっぱられてはいけません。「キャラオーキ」ではなく「キャライオーキ」、「カラーティ」ではなく「クラーティ」。ポイントは、あいまいに力なく、です。

最近、新聞で読んだ実際の経験談では、アメリカのスーパーマーケットの店員に「バナナ・チップス」について尋ねた日本人がどうしても話をわかってもらえず、最終的に生のバナナを手で指したら、「そうか、バナナね」とようやく通じたそうです。ちょっと信じがたい話のように思えるかもしれませんが、本当にありがちなことです。でも、「バナナ」よりも、少なくともイギリスだったら「ブナーナ」と言います。

英語を話そうと思えば、どうしてもこうした英語の発音の癖を理解することが重要なのです。「敵を知り己を知れば……」というわけです。

## ●ぼくが最初に感じた「？」

日本に来てすでに35年が経ちますが、最初に日本人の英語について「？」と思ったのは、それよりさらに前、ぼくが大学生だったときです。

ロンドン大学の日本語学科に入って、最初の1か月ほどはローマ字で文法の基礎を学んでいましたが、2か月目ぐらいから、ひらがなとカタカナを習いはじめま

した。ある日、カタカナの練習のためにいくつかの英語の単語をカタカナで書く問題が出ました。そのうちの 하나가 Oxford でした。

ぼくは躊躇せずにカタカナで「オクスフッド」と書きましたが、返ってきた解答用紙には×がついていました。なぜ不正解なのか、まったく理解できなかったのので先生に尋ねると、正解は「オックスフォード」と言うのです。

もちろんぼくは発音を正確に記すようになるはずだ、と先生に反論しました。しかし、日本語ではこう書くのだ、という既成事実の前では<sup>まち</sup>埒が明かなかったわけです。この瞬間、日本語と英語の微妙なズレを知り、嫌な予感がしましたね。日本に来てから、実際大変でしたから……。

まあ、それはさておき、英語では ford で**終わる地名や人名はすべてフッド [f\*d] と発音します**。この [\*] のマークは、先ほど触れた強調されない母音を表したものです。「ウ」と「オ」の中間の音をちょっと力なく言う感じ。Stanford は**スタンフッド** [stanf\*d] ということです。

[ ] の表記、わかりますか？ a のところにはアンダー

ラインを付しましたが、ここにアクセントがあるという意味です。それに対応するカタカナは太字で表記しています。また、カタカナでは発音を伝えるのにどうしても無理があるので、やむなく記したところは、少し文字を薄くしてあります。

では、ついでに、Oxford の最大のライヴァル校、Cambridge はどうでしょう。**ケインブリッジ** [keimbri] です。綴りの a にあたる音を必ずたっぷり長く発音します。

標準的な英語では(つまり地方の訛りではない場合)、**長く発音するときの a はエイ [ei] と発音**します。日本人は「エー」とか「エ」と発音することが多いのですが、これでは通じにくくなります。

例えば、lady は**レイディ** [leidi] です。「レディー」と言うと ready(準備 OK)と勘違いされがちです。baby も**ベイビ** [beibi] で、「ベビー」ではありません。同様に、angel の発音は**エインジュル** [einj\*] です。「エンゼル」と発音すると、英語圏の人間には何のことかきっとわからないでしょう。

ちなみに、angel のケース(ケースではなく)には、a の問題のほかに g(つまり [j] の音)の問題もありますね。これは general (=ジェヌルウ [jen\*ri]) についても言えることで、地名の Los Angeles も日本での発音では英語圏の人間にはわかりにくいのです。

「ロサンゼルス」のどこがおかしい？ おそらくそう感じる方が多いかもしれません。しかし、微妙な違いでも通じにくくなるものです。ロサンジュリス [losanj\*lis] が一番近いと思いますが、困ったことにイギリスではロサンジュリーズ [losanj\*liiz] と発音するので、他人のことを指摘すべきではないかな……。まあとにかく、どんなことがあっても、**g のジュ [j] をズ [z] と発音することはありません。**



## ●印象派の画家になってしまうお金

最初に、-ford というよく語尾に見られる綴りの発音について触れましたので、英語らしい語尾の発音にこだわって、もう少しお話を続けます。

最近の経済危機の関係もあって、ニュース(ニュースではなく)にも毎日のように経済のことが取り上げられ、ドルが下がった、株が下がった、などと報じられています。そんなニュースに頻繁に登場する言葉の一つ、「マネー」(money)。実は、「マネー」では英語圏ではまったく通じないと思ったほうがいいです。もしかしたら、フランス人の印象派の画家エドアール・マネと勘違いされるかもしれません。

money の発音はマニ [mani] です。**語尾の -ey は [i] で、しかも短めです。**決して伸ばしてはいけません。

同じように、alley (小道、路地)、valley (谷)は、「アレー」、「バレー」ではなく、**アリ [ali]、ヴァリ [vali]** となります。コンピュータ産業の中心となっている北カリフォルニアの Silicon Valley もシリコン・ヴァリ [silik\*n valii] になります。

その近くにあるサン・フランシスコから湾を渡ったところの町、Berkeley は極めてリベラル(というか、リブルウ [liːbər\*]) と言わなければわかってもらえません)な大学町として有名です。正しい発音はブークリ [b\*ki] です。ボストンにある人気の Berklee 音楽院とまったく同じ発音です。これも -ee と書いても、音が伸びるわけではありません。とにかく、英語では**語尾の [i] はすべて短く発音すると思えば間違いはない**と思います。

もう少し、-ey で終わる語でイ [i] と発音する例を探してみましょう。

猿の monkey も同じで、モンキーではなく、マンキ [manki] と発音します。ちなみに僧侶という意味の monk もマンク [mank] と発音します。ジャズの天才ミュージシャン Thelonious Monk も、モンクではなくマンク [mank] です。

スポーツで相手が打った球がバウンドしないうちに打ち返すのを volley と言いますが、これは**ヴォリ** [voli] と発音します。これを「ボレー」(テニスやサッカーではこれですね)と言ったり、あるいは「バレー」「バレーボール」と発音したりすると、英語圏の人間にはわかつ

てもらえません。まずほとんどの人は踊りの ballet の話をしていると勘違いするでしょう。

ついでにスポーツ関係で言うと、hockey はホッケーではなく、**ホキ** [hoki] です。jockey も**ジョキ** [joki] です。

人名では、Isley は**アイズリ** [aizli]、Mosley は**モウズリ** [mouzli]、Lesley は**レズリ** [lezli]、Godfrey は**ゴドフリ** [godfri] といった例があります。

またちょっと似たもので、-ay で終わる人名でも、例えば Murray (**マリ** [mari]) や Finlay (**フィンリ** [finli]) といった例があります。この場合も -ay の音は短い [i] で、長く伸ばしません。

どんなルールでもそうですが、**-ey にもやはり例外はあります**。すぐに思い浮かぶのが、灰色という意味の grey。発音は、グレーでも、グリでもなく、グレイ [grei] です。また、ロックグループ Eagles のメンバー、Glenn Frey は**フライ** [frai] という発音です。

語尾の -y でも、Ally (味方) は**アライ** [alai] と言いますし、spy は**スパイ** [spai]、fly は**フライ** [flai]、try は**トライ** [traɪ] という例もあります。しかし、これは例外的で、語尾の -y は [ai] と発音するとき以外は必ず短い [i] と

覚えておくとよいでしょう。

一番困るのは Morgan Stanley という企業名のよう  
な例です。2008 年秋の金融危機の際には、幾度となく  
その名前がニュースで流れました。アメリカの会社な  
のですが、日本支社は正式に「モルガン・スタンレー」  
というふうに登録しているようです。それはもちろん彼  
らの自由で、私がとやかく言うべきことではありません  
が、英語圏では**モウグン・スタンリ** [mougn stanli] と、  
最後の -ey はイ [i] と発音されています。